

# セーレン・キェルケゴールの新版全集 （刊行著作部門）の特徴とその意義

——『不安の概念』からの実例を通じて照明した——

平 林 孝 裕

## はじめに

1997年11月に刊行がその緒についた新しいセーレン・キェルケゴール全集（以下、新版全集）は、編集作業も順調にすすみ、全28巻55冊のうち、すでに6巻11冊がすでに刊行された<sup>(1)</sup>。この新版全集は、刊行著作、日誌・遺稿、未刊行著作、手紙・文書という四部門から成って、まさにキェルケゴールの著作活動の全体を包括した、研究史上画期的な事業である。

周知のように、キェルケゴールの全集と称されるテキストは三種類にのぼり、研究者はこれらに依拠して研究を展開してきた。しかし、今日までの研究がその基盤としてきた既存の全集に次元の相違こそあれ、少なからぬ問題があった点はもはや常識とされなければならないだろう。『全集第三版』として普及しているテキストは、しばしば考えられないような誤植・脱落がみられことは広く知られているし、従来、もっとも学問的に高く評価されて、翻訳・研究の際の底本や典拠に選択された『全集第二版』も、今日の文献学の水準に照らすとき、多分に問題を抱えていることは、すでに新版全集の責任編集者の一人である F. H. モーテンセン教授（オーゼンセ大学）によって緻密に論証されているからである<sup>(2)</sup>。

いったい、わたしたちがキェルケゴールを研究・解釈する際に、これを支えるのは、わたしたちの前にそなえられている《テキスト》にほかならない。したがって《テキスト》そのものが問題をはらんでいるとき、これに依拠した研究・解釈はすべて空しいものとなりかねないであろう。新版全集は、まさしく

そのような危機意識のもとに刊行されているのであって、その刊行は、将来にわたって、わたしたちが《キェルケゴール》を研究し、読みつづけるために堅固な基盤となることが期待される。

新版全集は、2009年に予定される完成時に全28巻55冊に達する大事業であり、すでに6巻11冊が刊行されたとは言え、それらは新版全集において刊行著作に分類された14巻27冊の半分以下である。また、その面目を一新することが予告されている、従来「日誌・遺稿集」と呼ばれてきた部分については見本刷がようやく公にされた段階である。したがって、新版全集の全体について評価することは、現段階で不可能であるし、それはまた憚られるべきことであろう。しかし、これまで刊行された部分（すなわちキェルケゴールの刊行著作部門）だけからも、新版全集は予想された以上に意義の高いものであることは疑いなく、これについて議論することは十分に必然性のあることだと思われる。

そこで本稿では、現在までに刊行された新版全集（すなわちキェルケゴールの刊行著作）について、その編集・刊行の過程で発表された諸論考ならびに新版全集のテキストそれ自身にもとづいて、既存との全集の比較からその特徴を紹介する。論述にあたっては具体的な例を挙げることにし、キェルケゴールの著作のなかでも比較的広く読まれ、研究史的にも重要な『不安の概念』のテキストをとりあげたいと思う。さらに、この論述を通じて、新版全集の意義を確認し、それによって日本におけるキェルケゴール研究の課題を照明することとしたい。

### 『全集第一版』・『全集第二版』における問題

新版全集の特徴と意義を明らかとするという本稿の目的をはたすために、まず既存の全集の特徴と問題点を確認しておく必要がある。すでに述べたように、キェルケゴールには、3種類の全集が編集・刊行されている。刊行年代順にあげれば、『全集第一版』（14巻、1901～06年）、『全集第二版』（15巻、1920～32年、索引・用語解説を収めた第15巻が付属）、『全集第三版』（20巻、1962～64年、用語解説・既存の全集との対照表を収めた第20巻が付属）である。このなかで、『全集第三版』は『全集第二版』をもとに刊行されているが、新たな本文批評が明示

されないのみならず、数多くの誤植・脱落がみられ、モーテンセン教授ならびにカペローン博士（コペンハーゲン大学・キェルケゴール研究センター所長、新版全集責任編集者）も断言するように<sup>(3)</sup>、学問的研究に供し得ない廉価版全集であるため、本稿では論述の対象外としたい。

従来、学問的な研究の基礎とされてきた二種類の全集は、いずれも同じ校閲者によって刊行されている。A.B.ドラクマン、J.H.ハイベア、そして H.O.ランゲである。各々の全集には、テキストの異同を示す補遺(Textkritisk Anhang)が付され、文献学的な自覚のもとに真正なテキストを読者へと提供しようとしたことが伺える。それぞれの全集に付された補遺から、テキストの決定に際して以下の資料が利用されたことが知られる。すなわち、キェルケゴールが存命中に刊行した初版本、また重版本が存在する場合には重版本、印刷原稿、手稿文書などである<sup>(4)</sup>。これら資料に依拠することによって、既存の全集の刊行者たちは文献学的に一定の水準を目指しているのあって、それは非難されるものではない。むしろ問題とされるべきは、これから述べるように編集原則ならびに資料の取扱いの実際である。

今日、刊行されるさまざまな作品全集をみれば明らかであるが、これらには刊行者序文または後書が付され、そのなかで刊行の経緯ならびに必然性、さらに編集にあって採用された方針・基礎とした資料などについて表明されるのが慣行となっている。読者は、この報告によってその全集の意義を測り、特徴を理解した上でそれぞれの用途に供することとなる。しかしながら、『全集第一版』、『全集第二版』にはそのような詳しい報告は欠け、ごく簡単な刊行者後書が添えられているにすぎない<sup>(5)</sup>。

この事実は、『全集第一版』および『全集第二版』に適用された編集方針・手続きほかを、読者はほとんど知り得ないことを意味する。読者は、実際のテキストの異同をみて、それらを間接的に判断するほか手段がない。この点で既存の全集は不親切、きわまりないと言ってよいだろう。このような刊行形態は、当時の著作集・全集に適用された文献学の水準からして必ずしも不当とは言えないかもしれないが、現代の文献学の水準からは批判されなければならない。

しかし、幸いなことに、著作集に付されるべき編集原則に関する報告に代わって、編集の実態を知るため資料がのこされている。すなわち、『全集第一版』の刊行者のひとりドラクマンは、その刊行作業に従事していた1903年に、論文「キェルケゴール著作集に適用された本文批評」<sup>(6)</sup>を発表して、かれらが直面した本文決定における問題点を挙げ、決定に際して適用した文献学上の一般原則、その具体例を紹介した。この論文によれば、『全集第一版』は、初版本を基礎的なテキストとして採用し、とくに重版が存在する場合にはこの重版本を採用すると報告されている。基礎とされたテキストは印刷に使われた清書原稿（印刷原稿）と照合され、これら資料を考慮してもテキストに疑問がのこる場合には、さらに準備草稿が検討された。また校正原稿が保存されている場合には、必要に応じて参照されたと言う<sup>(7)</sup>。

本文決定をめぐってドラクマンは「著者がそれに気づいた場合には、これを訂正しようと望んだか」否かが判断基準となると主張した<sup>(8)</sup>。つまり「著者」、この場合では、キェルケゴールの意図がすべての判断の尺度であり、刊行者の仕事は著者の意図を推測し、さまざまな事情（誤記、誤植、校正ミスなど）のために実現されなかった《オリジナル》なテキストを再現することになる。『全集第一版』の刊行者たちが、基礎テキストに重版本を採った理由も、この主張にそっているのだと思われる。すなわち重版本のほうがより多く著者の手を経ていると推測されるからである。ドラクマンの主張は、常識的で穏当な見解であるように思われる。

しかし、この原則を本文決定に適用するとき、きわめて遂行が困難であることがおのずと明らかになる。確かに重版本は初版本より、また初版本は印刷原稿よりも著者自身による校正または訂正を受ける機会が多かったであろう。だが、印刷原稿が刊行書として仕上げられるまでの過程を顧慮した場合、初版本の信頼性、重版本の信頼性はむしろ低下するとも考えられる。なぜなら、印刷の過程で著者以外の人間の手、たとえば著者以外の校正者、活字工ほかの手を経なければならず、それだけ著者以外に由来する誤りがテキストに混入する可能性が増すからである。したがって重版本が初版本より、初版本が印刷原稿よ

り著者の意図を反映するという判断はつねに正しいとは限らない。

また一方でドラクマンたちは、基礎としたテキストに問題があった場合には印刷原稿ほかを考慮してテキストを改めたと言う。しかし、印刷原稿ほか、いっそう著者の意図を反映し、《オリジナル》に近いと判断されるべきなのだろうか。この主張も必ずしも支持しがたい。というのも、しばしば起こるように、「著者」、キェルケゴール自身が校正の際に書き改める場合がみられるからである。校正原稿が保存されていない場合には、いったい印刷原稿がオリジナルなのか、はたまた校正をへて印刷されたテキストがそうであるかを判断する手立てはない。この問いに答える方策は「著者の意図」という基準に固執する限り見出すことができない。なぜなら、著者の意図を推測するという行為は、その判断を担う刊行者がどれだけ著者に通暁しているかに依存し（ドラクマンが本文決定の判断は恣意的であってはならぬとみずから戒めているにもかかわらず）<sup>(9)</sup>、多かれ少なかれ恣意的とならざるをえないからである。

ドラクマンら刊行者がみずから課した要求を実現するために費やした努力は評価されるべきであろう。すでに列挙した当時考えられる限りの資料を校合し、著者の意図を推測しながら、かれらがオリジナルに近いと判断したテキストを決定した。けれども結果として、カペローン博士が指摘するように<sup>(10)</sup>、印刷原稿、初版本、重版本、場合によっては準備草稿ほかというそれぞれ異なった層に属するテキストを切り貼りすることになってしまった。よく知られているように『全集第一版』の刊行者たちはすぐれた古典文献学者であった<sup>(11)</sup>。古典的な文献学は、伝承されたさまざまな文献資料から、かつて《実在した》テキストを復元することを重要な使命とする<sup>(12)</sup>。かれらは、古典文献学の手続きをキェルケゴールに適用してしまい<sup>(13)</sup>、直言すれば、現実には決して存在したことがない《オリジナル》なテキストを《捏造》してしたことになろう。カペローン博士の適切な評言を借りれば、刊行者によって「汚染されたテキスト」（原文のまま）を既存の全集は提供しているのである<sup>(14)</sup>。

また『全集第二版』の編纂にあたって採られた編集方針を知るための資料はないが<sup>(15)</sup>、カペローン博士が指摘するところによれば、『全集第二版』では編集

原則がやや改められ、初版本または重版本の印刷されたテキストよりも印刷原稿に保存された本文を重視し、「初版本テキストを正していく傾向が顕著である」（原文のまま）という<sup>(16)</sup>。だからと言って、編集原則が改められなければ、先に指摘した困難は根本的に解決されない。

さらに指摘されねばならない問題点は、モーテンセン教授の論考が明らかにするように、既存の全集においては、「特に句読法と正書法に関して」「全体を通じて不統一が目立つ」点である<sup>(17)</sup>。くわえてこれら全集のテキストは、キェルケゴール自身の手稿が保存されている場合には、初版本または重版本の印刷テキストと照合されたと報告されているが、高度な学問的な見識と繊細さが求められる文献学的な作業は、驚くべきことに、それぞれの全集の刊行者後書が伝えるように、ドラクマンとランゲの「夫人たち」によって担われている<sup>(18)</sup>。キェルケゴールの時代は、ゴシック書体とよばれる今日の筆記体とは異なる書体が一般的であり、キェルケゴールもゴシック書体で書いていた<sup>(19)</sup>。文献学の訓練を積んだ研究者にもゴシック書体の判読は必ずしも容易でないにもかかわらず、いったい何をして、この作業が「完璧になされた」とドラクマンらは判断したのだろうか<sup>(20)</sup>。

以上、検討したように、既存の全集は、第一に編集の原則において、そして、第二にその適用の実際において問題点をかかえていることは疑念の余地がない。ここに、これまで指摘した問題を配慮した新しいテキストが刊行されねばならない必然性がある。

### 新版全集の特徴について

新版全集は、1997年から刊行が始まったが、その編集・刊行作業はコペンハーゲン大学・キェルケゴール研究センターが担い、そのために文献学、神学、哲学、それぞれの分野の専門家から成る研究者グループが組織されている。刊行に至るまでには、センターに所属する研究者たちによる計画段階からの周至な準備が先立ち、くわえて全集刊行へ向けての準備作業はセンターの『年報』を通じて公開され<sup>(21)</sup>、それらは整理されて『全集』第一巻の注解用分冊の冒頭

で、あらためて報告されている<sup>(22)</sup>。この点で、新版全集は編集の実際において、専門的なスタッフに支えられた、しかも一貫した編集原則にもとづいた信頼に値する学問的な全集を目指していることが伺える。

つぎに新版全集の編集原則の特徴を確認しよう。

既存の全集が本文決定のための判断基準として「著者の意図」を採ったのに対して、新版全集はテキストの「歴史的な事実性または公正性」(historisk fakticitet eller autenticitet)をその基準にすると報告している<sup>(23)</sup>。「歴史的な事実性または公正性」とは、刊行とともに作品が獲得した「読者へと開かれた地位」(offentlighedskarakter)をいう<sup>(24)</sup>。作品は刊行されることによって、読者(または公衆、publikum)<sup>(25)</sup>に対して公開される。それは、いわば一つの出来事であると言ってよいだろう。その出来事があって初めて、作品はその著者と特権的な結びつきを読者により認められ、それと同時に、作品に対する批評ほかの受容も始まることを新版全集は重要視するのである<sup>(26)</sup>。作品にそなわった、このような事実性を担うと目されるものこそ「初版本」であり、それゆえに新版全集は初版本を本文決定のための底本に採用する<sup>(27)</sup>。

初版本は、いま述べた事実性のゆえに、すぐれて特権的な地位をもっている。新版全集の刊行者は、「初版本は、生成史と受容史との交点に位置する」とその特権性を表現する<sup>(28)</sup>。一般にテキストは、二つの歴史、すなわち生成史と受容史をもつとみなされる。生成史とは、作品が著者のさまざまな準備草稿から清書原稿に仕上げられ、さらに出版の行程をへて印刷テキストとなり、刊行後は手沢本の書きこみや重版における改訂などによって変遷する過程である。一方、受容史とは、刊行された作品が読者によって受容され、書評や批評が書かれ、それによってさらなる反響や影響を生み出す過程である。まず生成史的にみれば、初版本は、テキストが印刷・刊行されるまでのテキストの発生的(genetisk)過程と、この印刷されたテキストをもとになされる著者本人の書き込み(手沢本における)、重版における改訂というテキストの系譜的(genealogisk)過程を分ける<sup>(29)</sup>。そして受容史的にみれば、初版本をもって、著者は既刊の著作にくわえて新たに刊行された著作の著者として認められ、また読者による受容一般

が始まる（とくに多くの場合、初版本しか刊行しなかったキェルケゴールにおいては唯一の始まりである）<sup>(30)</sup>。それぞれの過程を二本の線で表わすとすれば、生成史の線と受容史の線は、まさに初版本において交差する。そのため、初版本の位置は生成史と受容史のそれぞれの線上に浮動する任意の点ではなく、二つの交点として一義的に定義可能な点であり、それぞれの線上で特権的な位置が与えられている。

この特権性のゆえに、初版本は本文決定上のいくつかの利点をもっている。

第一に、初版本は本文決定のため安定した基礎を与える<sup>(31)</sup>。すでに述べたように、既存の全集の問題点は、確認したように「著者の意図」を基準にテキストを操作したため、結果的に実在しなかった「汚染されたテキスト」を作り出してしまったことであつた。新版全集では「著者の意図」に代えて、「歴史的な事実性」が本文決定の基準に採用されていた。この基準を採ることによって、テキストの各層に異同があつたとしても、その異同を著者の意図を推測しつつ取捨選択し決定するという微妙な判断は回避される。その結果、さまざまに異なつた層に属する資料を総合した調和的なテキストを構成するという危険が新版全集では除かれていることになる。

言うまでもなく、初版本のテキストには印刷の過程で著者以外の人間が介入しており、「異質な」要素も混入しているであろう<sup>(32)</sup>。これを除去すべき要素であると、既存の全集の刊行者は考え、「著者の意図」という基準のもとでその作業を遂行しようとした。確かに、そのような「異質な」要素はキェルケゴールの意図（現実には意図があるとして）を誤って伝えるものかもしれない。しかし、すべての刊行テキストは校正をへて、消極的であれ著者の目で承認されている（passivt autoriteret）<sup>(33)</sup>。この点を考慮したとき、印刷原稿と初版本のテキストが異なり、また校正刷の訂正と初版本のテキストが異なっているとして、いずれが一層著者の意図を反映し、《オリジナル》であると判断できるのであろうか。これに対して「歴史的事実性」という基準は「著者の意図」という基準よりも、本文批評のための安定した基礎を与えることは明らかであろう。

第二に、初版本は決定されたテキストの均一性を保証する<sup>(34)</sup>。周知のよう



に、キェルケゴールの刊行著作は、限られた数の著作が重版されたにすぎない。それにもかかわらず既存の全集のように重版本を底本とすれば、その全集には初版本と重版本のテキストが混在することとなる。その不都合は、たとえば、作品を年代順に配列する際、1847年に重版された『あれかこれか』のテキストが、1841年の学位論文『イロニーの概念』と、1843年に刊行されて重版されることのなかった『反復』ないしは『おそれとおののき』の間に配列されていたという現実を考えれば、一目瞭然であろう。歴史的な事実性を重視する新版全集は、初版本を底本とするゆえに、そのような不統一は生じない。その結果、新版全集のテキストは初版本という均一な(ensartet)<sup>(35)</sup>資料により決定することが可能となっている。

これまで述べた初版本が有する「歴史的な事実性」の重みを認識すれば、そのテキストは、校訂作業によってむやみに変更されてはならないこととなろう。しかしながら、それは、事実性を志向する新版全集が初版本の単なる再現を志向していることにはならない<sup>(36)</sup>。テキストの理解をさまたげる明らかな誤りがある場合には刊行者によって示された原則にそってテキストは改善されなければならない。しかしながら、その変更はきわめて必要性が高い場合に限られるのであって、そのテキストの取り扱いは慎重に「保存的な態度」（控えめな態度、conservatism, konservatisme）によってされると言う<sup>(37)</sup>。

以上述べた新版全集の編集原則は、既存の全集が「著者がそのテキストをもって何を語ろうとしたか」を基準に本文決定をしたのに対して、「わたしたちの当時の思考法や言語などにかんする知識に照らして、今日考え得る理解のなかでいずれが、著者とその読者が共有しえたと想定するのがもっとも納得がいくか」を基準にするのだと説明されている<sup>(38)</sup>。既存の全集と編集原則の新版全集のそれとの転換をもっとも簡潔に表現するとすれば、「著者」（または作者）の視点から「読者」（または公衆）視点への転換であるともいえよう。そして、新版全集が提供するのとは当時の「読者」が《キェルケゴール》（もしくはその仮名著者）に帰属すると認めたテキストなのであり、そのようなテキストを提供することによって、そのような読者の体験を再現しようとしているのである。

### 『不安の概念』からの実例による照明

以下、既存の全集と新版全集との差異を確認するために、『不安の概念』から5つの箇所を選び、比較・検討したい。『不安の概念』を選んだ理由は、この著作が、単に相対的によく読まれているだけでなく、本文決定に供された資料の層が比較に相当である、つまり初版本（A）、重版本（B）、印刷原稿（R）、準備草稿（K）が整っているという理由による（ただし今回はAとBの異同がみられる箇所を実例として挙げていない）<sup>(39)</sup>。また既存の全集の編集者であるドラクマンが、先述の論文でしばしば言及していることにも拠る<sup>(40)</sup>。実例中の略号は、先にカッコで挙げたほか、既存の全集をSVとし、版の違いを数字で表記する。新版全集はSKSであらわす。本文批評上のアパルトゥスは“]”に続けて記した<sup>(41)</sup>。また、便宜のため田淵義三郎訳の日本語訳を併記している<sup>(42)</sup>。また、カッコ内の数字は、それぞれの参照箇所のページ数である。

#### 【例1】（SV1 388: 9—14., A 133: 15—21）<sup>(43)</sup>

Dersom det Dæmoniske er en Skjebne, da kan det hænde Enhver. Dette staaer ikke til at negte, om man end i vor feige Tid gjør alt muligt for ved Adspredelser og høi-røstede Foretagenders Janitscharmusik at holde eensomme Tanker borte, ligesom man ved Blus, ved Hylen, ved Bækkeners Lyd holder de vilde Dyr borte i Amerikas Skove.

もし悪魔的なものがひとつの運命だとすれば、それはだれの身にもふりかかるはずである。これは否定することができない。ちょうどアメリカの森林のなかで、焚火や叫び声や洗面器をたたいたりして野獣を遠ざけるように、臆病風に見まわられているわれわれの時代が娯楽やトルコ軍楽の騒々しい催しなどによって、あらゆる手をつくして孤独な思惟を遠ざけようとしても、である。（324）

SV1 (388) eensomme] R, eensom en Tanke A, B

SV2 (428—429) eensomme] (SV1 と同様)

SKS (422) eensom en Tanke] A, mørke < > eensomme Tanker K,

## eensomme Tanker *R*

Drachmann は、これを誤植と他の誤りの区別が付き難い例として挙げるが、結果的に *SV1* と *SV2* では、*R* にしたがって “eensomme” と改めている。その理由は、並行表現である “holder de vilde Dyr borte”（野獣を遠ざける）の “de vilde Dyr” が複数であるから、“eensomme Tanke” も複数が適当であり、「キェルケゴールの意図」に沿っていると推測したのでであろう。しかし、初版本を評価する *SKS* は、*A* から “eensom en Tanke” を採っている（この場合は “eensom” は副詞となり、翻訳は「ありとあらゆる手をつくして思惟を孤独なままに遠ざけようとしても」となる）。一方で、並行表現の対応が崩れ、文章の美しさが損なわれたかもしれない。しかし *A* ままでも文意が明白であり、あえて変更する理由はない。したがって、事実性の見地から初版テキストを保存的に採用するのである。（別のテキストを採用する可能性を残して、同時に *R* と *K* からの異文を挙げている。異文が挙げられる必然性については【例 3】・【例 4】で論じる。）

【例 2】(*SV1*, 373: 30—31., *A* 114: 12—13) <sup>(44)</sup>

Det her i de verdenshistoriske Forhold korteligen Antydende gjentager sig indenfor Christendommen i Individualiteterne.

ここで世界史的な関係において簡略に述べておいたことが、キリスト教の内部でそれぞれの個人において繰り返される。(308)

*SV1* (373) Individualiteterne] *K*, Individualiteterne *A*, *B*, *R*

*SV2* (412) Individualiteterne] (*SV1* と同様)

*SKS* (406) Individualiteterne] (注記なし)

*SKS* ではテキストの変更は「保存的」におこなわれ、初版本テキストが尊重される、と述べた。だが単なる初版本の忠実な再現ではない点は注意すべきである。これを示す実例である。*K* をのぞくあらゆる資料 (*A*, *B*, *R*) で

“Individualiterne”と記されているが、これは一般的には見られない語形である。ここで予想される正しい綴字は“Individualiteterne”である。SV1とSV2はKによって改めている。SKSが単なる初版本の再現であれば、“Individualiterne”という見慣れぬ語形もそのまま保存されるべきである。しかし、SKSでは、当時の辞典にも見られない語は特別の事情がないかぎり断りなく改めている<sup>(45)</sup>。初版本のテキストの読者も、そのような語形が考えられぬ以上、おそらくSKSのテキストのように改めて読んだと推測されるからである。この例に「当時の読者がどのようにテキストを読んだか」を重視する新版全集の特徴が現れている。

【例3】(SV1, 337: 38—338: 4., A 70: 19—28) <sup>(46)</sup>

Det Sexuelle som saadant er ikke det Syndige. (...) Uskyldigheden er en Viden, som betyder Uvidenhed. Dens Forskjel fra den sædelige Uvidenhed viser sig let, fordi hiin er bestemt i Retning af Viden. Med Uskyldigheden begynder en Viden, hvis første Bestemmelse er Uvidenhed. Dette er Begrebet af Blufærdighed (Schaam).

性的なものそれ自身は罪ではない。(…) 無垢は無知を意味する知である。無垢と倫理的無知との相違はたやすく知ることができる。無垢の無知は知に向かって方向づけられているからである。無垢とともに、その最初の規定が無知であるところの知が始まる。これが羞恥（シャーム）の概念である。(267～298)

SV1 (338) Uskyldigheden ] K, Uvidenheden A, B, R

SV2 (374) Uvidenheden ] (注記なし)

SKS (372) Uskyldigheden ] R, Uvidenheden A

この箇所は、無垢と無知の関係を説明する著名な一節であるが、SV1とSV2で決定されたテキストに相違がある。SV1では二重下線部が「無垢とともに」であり、SV2では「無知とともに」である。日本語訳はSV2を底本とするので

「無知とともに」となっているはずである。訳者は意味がわかりにくいために、ドイツ語訳・英語訳などで変更したのであろうか。しかしそれを示す注記は日本語訳にない。SV1 は意味がわかりにくいこと（この箇所が「無知とともに、その最初の規定が無知であるところの知が始まる」となる。）を重くみて、草稿から“Uskyldigheden”を採った。SV2 は印刷されたテキスト（A, B）にしたがって“Uvidenheden”を採ったが、注記がないため SV1 での判断が改められた理由が判然としない。SKS では草稿にしたがい<sup>(47)</sup>、“Uskyldigheden”としている。このように読者にとって意味が不明な箇所では SKS は、テキストの生成過程（また場合に応じてはテキストの系譜）を尊重しつつ、変更を試みている。

【例 4】（SV1, 361: 5—13., A 98: 13—21）<sup>(48)</sup>

Som da (i det foregaaende Capitel) Aanden, idet den skulde sættes i Synthesen, eller rettere idet den skulde sætte Synthesen, som Aanden (Frihedens) Mulighed i Individualiteten udtrykte sig som Angest, saaledes er her igjen det Tilkommende det Eviges (Frihedens) Mulighed i Individualiteten som Angest. Idet da Frihedens Mulighed viser sig for Muligheden segner Friheden, og Timeligheden fremkommer nu paa samme Maade som Sandseligheden i Betydning af Syndighed.

ゆえに、すでに〔前章において〕述べたように、もし精神が総合を定立するとすれば、そのとき個人における精神の〔自由の〕可能性が不安として現われたように、それと同様に未来的なものは、ここでもまた個人における永遠なものの〔自由の〕可能性が不安として現われる。こうして自由の可能性の前に自由が現われるとき、自由は倒れ、そして時間性はいまや完成と同じやり方で罪性の意味を負いつつ姿を現わす。  
(292)

SV1 (361) Muligheden ] A, B, R (*K mangler* [*K が現存しない。*]) Maaskee  
[おそらく] : Friheden

SV2 (398) Friheden ] *Rettelsen er tvivlsom, jvfr. S. 346. 22.* [訂正には

確証がない。346ページ22行目参照。] “medens Angest er Frihedens Mulighed som Mulighed for Muligheden.”

SKS (394) Friheden segner ] SKS, Muligheden segner A

この箇所でも SV1 と SV2 の判断は分かれている。しかし【例3】との違いは、先の例では草稿に、読者の推測と一致する異文が保持されていた。ところが【例4】では遺されたすべての資料が共通して“Muligheden”を指示し異文が存在していない。そのため SV1 は A をそのまま再現し、SV2 は推測にもとづいて“Friheden”を補った。ドラクマンも前掲論文では、『不安の概念』の他の箇所を参照して、“Muligheden”に代えて“Friheden”と読む可能性に言及したが、異文が存在しないという理由から、初版本テキストのままとすべきであると結論づけている。しかし不都合な点は、「[[自由の] 可能性が自由の可能性の前に現われるとき、(…)]」と意味不明なテキストとなることである。この理由から、SV2 の刊行の際は、ドラクマンらもあえて推測にもとづいてテキストを改めたのであろう。

SKS も“Friheden”に改めている。このような場合、意味不明なままに放置するのではなく、キェルケゴールの読者がどのように読んだかを推測してテキストの変更を SKS の責任で提案する。ただし、なるべく少ない変更によってである。この場合は一単語を置き換えている。しかしながら、既存の全集と異なる点は、SKS の刊行者が、くわえて変更によって理解可能となったテキストが刊行者の責任で提案された点を、つねに明示しているところにある。すなわち、他の異文(この場合は、初版本にみられるテキスト)が、SKS が提案したテキストと一瞥で検討できるようにテキストの欄外に、その資料の典拠とともに記されるのである。

【例3】および【例4】が示していることは、SKS のテキストが可能なテキストの提案であり、これを選択するか、異文を選択するかは読者の裁量に委ねられているという事実である。この点が既存の全集に対する新版全集の大きな

特徴であると思われる。

【例 5】（SV1, 295: 32—36., A 18: 4—9）<sup>(49)</sup>

Naar det her Udviklede forholder sig rigtigt, da vil man let see, med hvad Ret jeg har kaldet nærværende Skrift en psykologisk Overveielse, samt hvorledes den, forsaavidt den bragtes til Bevidsthed om sit Forhold i Videnskaben, hører hjemme i Psychologien, og igjen tenderer til Dogmatiken.

以上に述べたことが正しいとするなら、私にはなんの権利があってこの著作を心理学的考察と名づけたか、また、この著作が学問上占めるみずからの位置を自覚するかぎり、それがなぜ心理学に属し、そしてまた教義学に向かうものであるかが、容易にわかってもらえるであろう。(220)

SV1 (295) i Videnskaben ] (注記なし)

SV2 (328) i Videnskaben ] (注記なし)

SKS (331) i Videnskaben ] *således også K, R* [K, R でも同様]

現存する多くの（またはすべての）資料が一致するからと言って、それが真正なテキストと定められるわけではない点はすでに見た通りである。【例 5】では、もし直前の“*Forhold*”と“*Videnskaben*”の連語関係を考えれば、二重下線部は“*sit Forhold til Videnskaben*”となるのが一般的である。しかしながら、その理由から【例 3】・【例 4】と同様に書き改めることは許されないであろう。なぜなら、すべての資料を顧慮しても、この変更を指示する資料は存在しないし、現存の本文でも必ずしも意味不明ではなく、そもそも先述の連語関係は絶対的ではないからである。そこで SKS は、一見奇妙な連語関係が著者自身に由来することを欄外での確認することを選択している。

その結果、読者に次のような可能性が拓かれる。まず、“*til*”に代えて“*i*”となる特別の理由を解釈する可能性である。たとえば、“*i Videnskaben*”が語(句)修飾（“*sit Forhold*”を修飾）ではなく、文修飾（文全体、具体的には“*betragtes*”

を修飾）であると考えるか、または“*Forhold*”の意味を“*til*”との連語的な関係を結ぶ用法（「関係」の意味で使われた場合）ではなく、他の用法（「境位、立場」の意味で使われた用法など。ヒルシュ他のドイツ語訳はこの解釈を採用している。

“*ihrer Stellung in der Wissenschaft*”<sup>(50)</sup>、田淵訳はこれに従っていると推測される。）であると考える必要があるだろう。第二に単なる誤記等としてテキストを訂正する可能性もある（ホングの英語訳はこの解釈を採用したと思われる。“*its relation to science*”<sup>(51)</sup>）。いずれにせよ、新版全集においては、その判断が新版全集を手にした読者に留保され、読者の判断にもとづいた解釈の可能性が開かれていることに注意すべきである。

### 新版全集のキェルケゴール研究における意義

以上の論述ならびに実例によって、新版全集の特徴を素描してきた。新版全集は、「著者の意図」に代えて、テキストの「事実性」（または公正性）を本文決定の尺度として採用し、その結果、初版テキストを底本とし、そのテキストの取扱いにおいて「保存的な態度」とる点に特徴がある。しかしながら「保存的な態度」において志向されるのは、実例から照明されたように、単なる初版本テキストの再現ではなく、一定の原則により改善されたテキストの提供であった。公開された編集原則にもとづき、専門家グループによって担われた新版全集は、これまでの全集の問題点を払拭し、これまでになく信頼にたるテキストを、わたしたちに提供していると言ってよいだろう。

さて、このような新版全集の刊行によって、今後のキェルケゴール研究は、どのような課題を与えられたのであろうか。

テキストの《信頼性》という点で、新版全集が既存の全集に勝っていることは、これまでの論述から明白である。その意味で、新版全集はいわゆる《決定版全集》であると言えるかもしれない。しかし、新版全集によって提供されるのは、《信頼にたる》真正なテキストであるにしても、それは変更を許さない唯一の《決定的》テキストではない。むしろ、本論で挙げた実例から明らかにように、さまざまなテキストにふくまれる異同のいずれを採用するかは原則的



には新版全集の読者に委ねられている。

したがって、新版全集の読者には、テキストの異同をめぐっての解釈の可能性、さらにそれに依拠した読解の可能性がのこされており、「解釈学的な生産性」(hermeneutical productivity) が確保されている<sup>(52)</sup>。これを確保するために、新版全集の本文には、ときに理解しにくいものこされたとも言われる<sup>(53)</sup>。新版全集が提供するテキストは、刊行者が《著者》(author) の《権威》(authority) に依拠して読者に強制されているのではない。本文に採られたテキストと異文との間の選択は読者に開かれており、その選択にもとづく読解という困難な課題は読者が責任をもって果たさねばならないのである。

とりわけ日本のキェルケゴール研究は、しばしばデンマーク語の原典テキストに対する十分な配慮を欠き、安易にドイツ語訳または英語訳に依存しつづけてきた。しかし、今日、これらのドイツ語訳ならびに英語訳が底本としたテキストさえ少なからぬ問題をはらんでいることが明らかとなり、その結果、新版全集の刊行に並行して、これをあらたな底本とした全集が企画される段階にすすみつつある。日本のキェルケゴール研究が、このような世界的なキェルケゴール研究の趨勢を無視し、現状に甘んずるとすれば、それは怠惰の謗りをまぬかれないだろう。あらたなドイツ語訳、ないしは英語訳の刊行を待つというのであろうか。しかし、すでにこれまでの論述で明白であるように、たとえ将来、新しい翻訳が完成したとしても、研究者は、新版全集によって、読者に課せられた、テキストに対する先述の責任を回避することはできない。新版全集の刊行というキェルケゴール研究史上、画期的な出来事は、なによりも日本における従来の研究態度の刷新を促しているのであり、わたしたち研究者は、その課題を真摯に受けとめるよう迫られているのである。

## 【参考文献】

### 1. キェルケゴール『不安の概念』のテキストならびにその翻訳

- A Vigilius Haufniensis [す: Søren Kierkegaard], *Begrebet Angest. En simpel psykologisk = paapegende Overveielse i Retning af det dogmatiske Problem om Arvesynden*, Kjøbenhavn: C. A. Reitzel, 1844. [関西学院大学図書館所蔵本]
- SV1 Søren Kierkegaard *Samlede Værker, Bind. IV*, udgivet af A. B. Drachmann, J. H. Heiberg og H. O. Lange [Første Udgave], Kjøbenhavn: Gyldendal, 1902, 223—429, [Textkritisk Anhang] 436—437.
- SV2 Søren Kierkegaard *Samlede Værker, Bind. IV*, udgivet af A. B. Drachmann, J. H. Heiberg og H. O. Lange [Anden Udgave], Kjøbenhavn: Gyldendal, 1923, 303—473, [Textkritisk Anhang] Tillæg, 6—8.
- SKS Søren Kierkegaards *Skrifter, bind 4*, udgivet af Søren Kierkegaard Forskningscenteret, København: Gads Forlag, 1997, 307—461.
- KGW Søren Kierkegaard, *Der Begriff Angst / Vorworte* (Gütersloh Taschenbücher Siebenstern 608), übers. von Emanuel Hirsch, Gerd Mohn: Gütersloh Verlag, 1983 (<sup>1</sup>1965).
- KW Søren Kierkegaard, *The Concept of Anxiety (Kierkegaard Writing's, VIII)*, ed. and trans. by Reider Thomte, Princeton (New Jersey): Princeton U.P., 1980.
- 日本語訳 田淵義三郎訳『不安の概念』（梶田啓三郎編『世界の名著 キルケゴール』（中公バックス51）、中央公論社、1984年、197—368ページ。

### 2. その他の参考文献

- Cappelørn, Niels Jørgen, Joakim Garff og Johnny Kondrup [1996], *Skriftbilleder: Søren Kierkegaards journaler, notesbøger, hæfter, ark, lapper og strimler*, København: G•E•C Gad.
- Cappelørn, Niels Jørgen, Joakim Garff og Johnny Kondrup [1997], “Indledning”, *Kommentarer til Søren Kierkegaards Skrifter*, bind 1, København: G•E•C Gad, pp.7—14.

- Drachmann, A. B. [1911], “Textkritik, anvendt paa S. Kierkegaards Skrifter” (<sup>1</sup> 1903), *Udvalgte Afhandlinger*, Kjøbenhavn: Gyldendal, pp.154—174.
- Drachmann, A. B., J. L. Heiberg og H. O. Lange [1906], “Udgivernes Efterskrift”, *Søren Kierkegaard Samlede Værker* [Første Udgave], Bd. XIV, Kjøbenhavn: Gyldendal, p.377.
- Drachmann, A. B., J. L. Heiberg og H. O. Lange [1932], “Udgivernes Efterskrift”, *Søren Kierkegaard Samlede Værker* [Anden Udgave], Bd. XIV, Kjøbenhavn: Gyldendal, Tillæg, p.27—28.
- Garff, Joakim [1996], “Regulativ for udarbejdelse af realkommentarer til *Søren Kierkegaard Skrifter*”, *Kierkegaard Studies: Yearbook 1996*, Berlin / New York: de Gruyter, pp.527—545.
- Garff, Joakim, m. fl. [1997], “Introduktion til kommentering”, *Kommentarer til Søren Kierkegaards Skrifter, bind 1*, København: G•E•C Gad, pp.50—61.
- Kondrup, Johnny [1996], “Textkritische Richtlinien für *Søren Kierkegaards Skrifter*”, *Kierkegaard Studies: Yearbook 1996*, Berlin / New York: de Gruyter, pp.454—485.
- [1997], “Critical Conservatism, Illustrated with Examples from *Either/Or*”, *Kierkegaard Studies: Yearbook 1997*, Berlin / New York: de Gruyter, pp.282—305.
- Kondrup, Johnny m. fl., [1997], “Tekstkritiske retningslinier for *Søren Kierkegaards Skrifter Trykte Skrifter*”, *Kommentarer til Søren Kierkegaards Skrifter, bind 1*, København: G•E•C Gad, pp.15—49.
- Mortensen, Finn Hauberg [1993], *Kierkegaard. På Sporet af En Ny Udgave*. 2 bd., Odense: Institut for Litteratur, Kultur og Medier ved Odense Universitet.
- [1996], “On the Contexts, Structure and Functions of *Søren Kierkegaards Skrifter*”, *Kierkegaard Studies: Yearbook 1996*, Berlin / New York: de Gruyter, pp.527—545.
- Rubow, Paul [1938], *Den kritiske Kunst. En Afhandling om filologisk Litteraturforskning*, København: Gyldendal.
- カペローン、ニールス [1998]、橋本淳訳「セーレン・キェルケゴールの新版全集の刊

行」、『神学研究』（関西学院大学神学研究会）45号、71～96ページ。

モーテンセン、フィン H. [1993]、橋本淳訳「キェルケゴールのデンマーク語テキストの問題とその再構成について——批評的新版の刊行を求めて」、『神学研究』（関西学院大学神学研究会）40号、103～141ページ。

### 【注】

- (1) 1999年11月現在. 本論は、新版全集の意義を日本の読者へと紹介することを願って書かれたが、論述に際して参考文献に挙げられたデンマーク・キェルケゴール研究センターからの諸論考に多くを負っている。また、筆者が日本学術振興会の助成をえて一年間（1996年度）にわたってコペンハーゲン大学・神学部で在外研究に従事した折に、センター主催の研究セミナー他においてのみならず、センターの方々に個人的にご教示いただいた内容に依拠している。これらの論考と機会がなければ、本稿も書かれることがなかったことを感謝とともに付言しておきたい。
- (2) モーテンセン [1993] .
- (3) モーテンセン [1993] p.111 & 118, カペローン [1998] p.86.
- (4) 印刷原稿、手稿文書は、現在、王立図書館キェルケゴール資料部（Kierkegaard Arkiv）に厳重に保管されるが、すべての著作についてこれらが現存するわけではない。
- (5) Drachmann, Heiberg og Lange [1906] p.377, Drachmann, Heiberg og Lange [1932] pp.27—28. モーテンセン [1993] pp.188—190参照。
- (6) Drachmann [1911] pp.154—174.
- (7) Drachmann [1911] pp.154—155.
- (8) Drachmann [1911] p.157.
- (9) Cf. Drachmann [1911] pp.157—158.
- (10) カペローン [1998] p.86.
- (11) ドラクマン（Anders Bjørn Drachmann, 1860—1935）は、古典文献学者であり、コペンハーゲン大学教授、カールスベア財団総裁を務めた。彼はドイツ文献学の影響下、古代の文献を取り扱う技術を磨き、これをキェルケゴールの全集刊行で発揮した。またハイベア（Johan Ludvig Heiberg, 1854—1928）も古典文献学者

であり、ドラクマンの先輩教授であった。ランゲ（Hans Ostenfeld Lange, 1863—1943）は、王立図書館の上級司書を務め、全集の刊行に携わった。のちにかれはコペンハーゲン大学のエジプト学の講師も兼ねている。〔以上の紹介は、『デンマーク伝記事典 第3版』, Sv. Cedergreen Bech (red.). *Dansk Biografisk Leksikon*, Gyldendal によった。〕

- (12) Kondrup [1997] p.284.
- (13) Cf. Drachmann [1911] p.168. ドラクマン自身が古典文献学の方法を全集の編集に採用したことを明言している。キェルケゴールのテキストに古典文献学的手法が適用される不合理を、すでにルーボウが指摘している。Rubow [1938] pp.26., cf. Kondrup [1997] pp.296—297.
- (14) カペローン [1998] p.86.
- (15) Kondrup [1997] p.283.
- (16) カペローン [1998] p.86.
- (17) モーテンセン [1993] p.118. 既存の全集では、しばしば何の注記もなく、初版本の句読法が改められている。たとえば『不安の概念』では、筆者が新版全集と対照しつつ、確認しただけで9箇所の変更が発見された。そのなかには、あきらかな誤植で訂正が適当な箇所もあるが、句読法によって解釈の余地があるもの、また文体にかかわるものも見られた。それ以外にも既存の全集は、無反省に、ときには信じられない本文の変更が加えられている。たとえば、『不安の概念』の目次は初版本では、新版全集がそうであるように、「序文」（Forord）と「緒言」（Indledning）の間におかれ、ページ数は付記されていない。一方、『全集第一版』は目次を本文末尾に移し、ページ数を付している。『全集第二版』は位置こそ初版本を再現するものの、やはりページ数が付されている。さまざまな点で既存の全集には問題が多いが、とくにそれは遺稿文書と対照した際に明確になるとされる。『全集第二版』とキェルケゴールの遺稿文書を対照したさらに詳細な分析はモーテンセン教授の前掲論文のほか（モーテンセン [1993] pp.122—139.）、同教授の次の論考を参照されたい。Mortensen [1993], bind 1, pp.51—68 & bind 2（第2巻は、第1巻の当該の分析の資料編）。
- (18) Drachmann, Heiberg og Lange [1906] p.377., Drachmann, Heiberg og Lange [1932] p.27.
- (19) キェルケゴールの書体がいかなるものであったかは、以下の文献に収められた豊富な図

セーレン・キェルケゴールの新版全集（刊行著作部門）の特徴とその意義

版によって知られる。Cappelørn, Garff og Kondrup [1996] .

- (20) Cf. モーテンセン [1993] p.109., Mortensen [1993] p.32.
- (21) Garff [1996], Kondrup [1996], Kondrup [1997], Mortensen [1996] .
- (22) Garff m. fl. [1997], Kondrup m. fl. [1997] .
- (23) Kondrup m. fl. [1997] p.16.
- (24) Kondrup m. fl. [1997] p.17.
- (25) Ibid.
- (26) Ibid.
- (27) Kondrup [1997] p.284, cf. Kondrup m. fl. [1997] p.16. 当時の印刷技術の実態を顧慮して、複数の初版本を本文決定に用いたと言う。Kondrup m. fl. [1997] 18., cf. カペローン [1998] p.89.
- (28) Kondrup m. fl. [1997] p.17.
- (29) Cf. Kondrup m. fl. [1997] p.26.
- (30) Kondrup m. fl. [1997] p.17.
- (31) Ibid.
- (32) Ibid.
- (33) Cf. Kondrup m. fl. [1997] p.20.
- (34) Kondrup m. fl. [1997] p.18.
- (35) Ibid.
- (36) カペローン [1998] pp.20—25 & pp.28—29.
- (37) Kondrup m. fl. [1997] p.19., カペローン [1998] p.89. 新版全集で採用された本文批評における「保存的な態度」は、責任編集者の一人であるコンドロップ博士による、以下の論文において、『あれか／これか』のテキストを例にとりつつ、詳しく紹介されている。cf. Kondrup [1997] .
- (38) Kondrup m. fl. [1997] pp.19—20. 既存の全集とのこのような編集原則の差異は、既存の全集が「(新) ロマン主義的＝体験解釈学」(en romantisk eller nyromantisk indlevelses-hermeneutik) を前提するのに対して、新版全集は「新ヘーゲル主義的解釈学」(en nyhegeliansk hermeneutik) に基づくのだとも説明されている。さらに、この新版全集は、テキストから現代的な解釈を読み取るべきだと主張する見解ともみずからを区別する。すなわち、「テキストは、今日どのように理解されるべきか」が新版全集における編

集原則ではない。

- (39) 『不安の概念』のテキストで、*A* と *B* が相違するのは、334ページと387ページのみである。初版本と重版本とに対するキェルケゴールの一般的な態度については次の文献を参照されたい。カペローン [1998] pp.88—89.
- (40) ドラクマンの論文の対応箇所は、実例の参照箇所に付した注において指示した。
- (41) 記号の表記などは次の論文に倣った。Kondrup [1996]. “Uskyldigheden” *R*, Uvidenheden *A*”とは、“Uskyldigheden”は、*R* から採られ、*A* に“Uvidenheden”という異文が見られる、という意味である。
- (42) 田淵訳を選んだ理由は、今日入手が比較的容易な日本語訳のうち、デンマーク語を底本であると明言する翻訳は、田淵訳のみだからである。ただし田淵訳の底本は『全集第二版』である。
- (43) Cf. Drachmann [1911] p.156.
- (44) Cf. Drachmann [1911] p.157.
- (45) Kondrup m. fl. [1997] p.23., カペローン [1998] p.90.
- (46) Cf. Drachmann [1911] p.162.
- (47) 本文批評の基礎となる、印刷原稿と準備草稿との区別は一概に決定しがたい面がある。印刷原稿にキェルケゴールによって変更が加えられていたとき、書き加えられた言葉は印刷原稿 (*R*) に分類されるべきなのか、また準備草稿 (*K*) に分類されるべきなのか。そのような例を『不安の概念』にも見ることができる。以下の文献の図版を参照。Cf. Cappelørn, Garff og Kondrup [1996] p.102. この区別を *SV1*、*SV2* と *SKS* のそれぞれの編集者がいかに判断したかはにわかに知りたい。現実には“Uskyldigheden”が *R* か *K* か表記が両者では分かれている。
- (48) Cf. Drachmann [1911] pp.162—163.
- (49) この例にドラクマン (Drachmann [1911]) は言及していない。
- (50) *KGW*, p.21.
- (51) *KW*, p.23.
- (52) Kondrup [1996] p.301.
- (53) Kondrup [1997] p.296.